

所属；吉備国際大学 心理学部 子ども発達教育学科

氏名；田中 卓也

タイトル；『少年マガジン』における読者の研究—創刊当初（1959年～1962年）における誌面内容の構成とマガジン愛読者の関心に注目して—

### 【新規性】

本研究発表は、戦後の少年雑誌ブームの火付け役となった『少年マガジン』を取り上げ、同誌の誌面内容および構成やそこに集った読者の特徴を見いだすことが目的である。明治期から昭和戦前期までのわが国における雑誌研究では、当時の人気を誇った少年少女雑誌（博文館刊『少年世界』・『少女世界』、講談社刊『少年倶楽部』など）を中心に取り上げ、読者投稿欄の投書から彼の内在する心性の特徴を明らかにしたものは数多く蓄積が残る。戦後以降のわが国の雑誌研究はとりわけ誌面構成や作品に焦点を当てたものが多く（斎藤次郎『子どもと教育 少年ジャンプの時代』＜岩波書店、1996年＞や大野茂『サンデーとマガジン』＜光文社、2009年＞等）雑誌発刊との関連性やその後の影響について解明されることが多かった。本研究は戦後に発刊され、いまなお若者の支持を得ているマガジン愛読者の心性に迫り、マガジン読者が熱狂することになった背景、投稿欄が読者によって賑わすようになったのかについて解明することは「戦後のわが国における少年雑誌読者の意識形成の研究」の一端に光を照らすものとなり、新規性を有する研究になると考えることができる。

### 【社会的有用性】

『少年マガジン』誌は、1959（昭和34）年3月17日に講談社より創刊されて以来、50有余年以上もの間、わたしたち（とくに若者世代を中心とした）の生活において娯楽、教養の面で大きな役割を果たしてきた。創刊号の表紙は時の人気力士で同年大相撲春場所で横綱昇進を決めた朝潮太郎をモデルに抜擢し、マスコミ（とりわけテレビ）の台頭とあいまって、お茶の間を賑わせることに成功をもたらしたものといえる。ライバル誌と称された小学館刊『少年サンデー』との白熱したマンガ抗争を繰り返しながら、多くの若者読者を取り込むことに成功し、その後の「マンガ」の大衆化をもたらすことにもなったのである。また同誌は戦後の少年マンガ雑誌において早い時期から「読者コーナー」を設け、人気を博した。第二次世界大戦の最中には雑誌の誌面も戦時体制下に伴う戦時色で染められ、大政翼賛会の指示のもと、愛読者の声が奪われることを余儀なくされたが、同誌の「読者欄」の復活は、戦後の復興に力を注ごうとする若者に明るい希望・夢をもたらすものになった。そして現今におけるわが国の「マンガ文化」が世界から評価される礎石になったものと思われる。

## 『少年マガジン』における読者の研究

一創刊当初(1959年～1962年)における誌面内容の構成とマガジン愛読者の関心に注目して一

田中 卓也(吉備国際大学)

### 【はじめに】

本発表は、戦後の少年雑誌ブームの火付け役となった人気雑誌『少年マガジン』を取り上げ、同誌の創刊当初における誌面内容および構成やそこにつどった読者の性格などを見いだすことが目的である。

『少年マガジン』誌は、1959(昭和34)年3月17日に講談社より創刊された。創刊号の表紙は時の人気力士で同年大相撲春場所で横綱昇進を決めた朝潮太郎であった。創刊号では20万部を超える売れ行きがあり一見好調に見えたが、他雑誌の追隨にあい、部数の低迷が続いていた。しかしながら同誌第3代編集長内田勝、第4代編集長宮原照夫らの手腕によるところが大きく、1970年代には150万部の売り上げを達成した。これを機に少年マンガ雑誌の売り上げ1位の座を不動のものとした。また大学生を中心とした読者には特に愛読されることになった。1973(昭和48)年にマガジン人気を低落させる衝撃的な出来事が起こる。集英社刊行の『少年ジャンプ』の登場であった。同誌の爆発的人気のあおりを受け、少年マンガ雑誌売り上げ1位の座を奪われることになった。その後しばらくは低迷期が続くが、平成の時代に入り再び、同誌の売り上げにおいて1位の座を手にするようになった。2002(平成14)年8月に再び『週刊少年ジャンプ』に首位を奪われ、それ以降少年マンガ雑誌売り上げ2位に甘んじている状況が続いている。戦後の少年マンガ雑誌において早い時期に「読者コーナー」を設けたのは、『マガジン』誌であった。これまでに発表者は明治期から昭和戦前期にかけて発刊されてきた児童雑誌に着目し、読者の性格や特徴について明らかにしてきた。ここでは、誌上で仲間を見つけ、交際し、次第に誌友同士の絆・結束を結ぶようになり、いわゆる「読者共同体」を形成したことが検証してきた。また投書欄を通じて、読者等の共同体「われわれ」というアイデンティティを見いだしたとされる。しかしながら戦後に発刊された児童雑誌においても読者共同体が存在したのかという問題は未だ残されているため、その問題を解明することを試みるものである。「読者」に焦点をあてた研究はこれまでに多くの蓄積が存在している。①今田絵里香『少女の社会史』では『少女の友』・『少女倶楽部』を対象とし、少女雑誌に示された「少女」の行為規範の変遷を明らかにしながら、読者が少女雑誌

の提示する「少女」をいかにとらえ、受け入れたのかについて分析・考察を試みた。②本田和子『女学生の系譜』では女子学生の読者共同体の存在を指摘し、「少女幻想共同体」と名付けている。また川村邦光はその著書『オトメの祈り』において、明治後期の少女雑誌を考察し、投稿欄を通じて、女学生の資格の有無に関わらず、ペンネームを用いて『少女』という虚構集団を形成することを明らかにした。川村は「オトメ共同体」とその読者集団を呼称した。戦後に発刊された少年雑誌においても、「読者共同体」は形成されえたのか、という問題意識をもちながら、現在、戦後の少年雑誌の読者の研究についても着手しはじめている。

(田中卓也「児童雑誌『少年ブック』における読者の研究—前身雑誌『おもしろブック』の創刊と同誌愛読者の特徴を中心に—」日本幼児教育学会第20回大会(於敬愛大学)口頭発表済、2011年9月11日)

さて『少年マガジン』に関する研究には、これまでに発刊された多くの子ども文化をテーマとする研究書、テキストなどでも見られる(たとえば原昌・片岡輝編『児童文化』建帛社、2004年)。またライバル誌と称された週刊『少年ジャンプ』に関する研究も存在する(斎藤次郎『少年ジャンプの時代』岩波書店、1996年)投稿欄が読者によって賑わいを見せたのは、読者の投書内容を大切にする編集部の方針の影響があり、編集部と読者が密接な関係にあったからであろう。講談社は戦前から刊行された少年・少女雑誌においても投稿欄は充実していたことから考えると、戦後に出された同誌においても、投稿欄を充実させようとする編集者側の意図があったのではなかろうか。また同誌をこぞって購読した愛読者らも時代を超えて投稿欄の投書を通じて、仲間意識の形成やメルクマールを備えた読者共同体が存在していたのではないだろうかと考える。当日の発表では、同誌の分析から『マガジン』誌の特徴を浮き彫りにすることができればと考えている。

なお本研究は「近代日本における少年雑誌の普及と少年読者意識形成に関する歴史的研究」(平成23年度文部科学省科学研究費助成事業科研費研究【基盤研究C】<課題番号:23531032>)による研究成果の一部である。

### 【1】雑誌『少年マガジン』について

#### ①発行元講談社と誌面構成

『少年マガジン』の発行元はこれまで多くの大衆雑誌を発刊していた老舗書籍会社の「講談社」(東京都文京区音羽3-19)であった。なお同誌編集人は牧野武朗であり、かれが初代編集人を務めた。牧野は編集人

として、これまでに多くの雑誌を手がけた人物であった。また同誌には、「編集賛助員」が置かれており、梅根悟（東京教育大学教授）、海後宗臣（東京大学教授）、上飯坂好実（東京都文京区立真砂小学校校長）、木下一雄（東京都教育委員長）、高木藤樹（附属豊島小学校教諭）、辰見敏夫（東京学芸大学助教授）、古川清行（東京学芸大学附属竹早小学校教諭）、森久保仙太郎（和光学園小学部長）の6名が名を連ねた。創刊当初より誌面上にも彼ら6名の教育関係者は読者に紹介されていたこともあり、読者らの知るところとなったように思われる。誌面構成においては、その多くをスポーツに関する記事を掲載していることがわかる。とりわけ活躍していた長嶋茂雄、王貞治らをはじめ、野球選手に関するものが多かったようである。また「連載まんが」についても誌面に登場し、「左近右近」（吉川英治原作・霜川達彦脚色・波良章）、「13号発進せよ」（高野よしてる）、「もん吉くん」（伊東章夫）、「良太は負けない」（山田はるき）など当時を代表とするマンガが掲載された。また吉川英治、川口松太郎のごとく著名作家陣も名を連ねた。読者に注目させようとする編集者側の意図がみてとれる。また創刊当初から現在のマガジン誌のようなマンガ一色ではなかったこともうかがえる。

## ②価格の変化と表紙の顔ぶれ

この当時の雑誌の価格はおおよそ1冊110円であったといわれるなかで、同誌は第1巻第1号から第4号までが定価40円（誌面全80頁）であり、毎週木曜日発売であった。また第1巻第5号から第1巻第19号が定価30円（全94頁）であり、毎週水曜日発売へと変更になっている。さらに第1巻第20号から定価30円（全110頁）へと変わっている。誌面に厚みが増しながらも、雑誌の値段は安価でおさていた。誌面をかざる表紙には、創刊当初から基本的に男子2人から4人程度が掲載されることが多かった。また有名な野球選手と少年、少年同士の組み合わせ（巨人ファンの）などの工夫があった。女子が掲載されてはいなかったから、男子中心の雑誌の意味合いが強かった。

## 【2】投書欄「マガジン・ポスト」への投稿

投書欄として「マガジン・ポスト」が誌面に設定されたのは、先述したとおり、同誌第1巻第2号からである。誌面はおおよそ2頁程度であり、主筆は「マガジン太郎」を名乗る一編集人であった。名前は明かされることはなかったが、投書家からは絶大な人気を誇っていたようである。創刊当初の頃の誌面の特徴として、プロ野球、プロレスに関する話題が多い。とりわけ選手、レスラーをヒーローとして読者が憧れるような雰囲気醸成を醸し出していたようにもみられる。誌面に

掲載された投書を紹介する。

※同誌第1巻第12号（1959年6月11日）

■ぼくらたちの黒田先生は、すごいプロ野球のファンです。このあいだ、社会科のとき、大きな髪に選手の名まえを出身地べつづきの書いたのを持って来たので、なににするのかと思ったら、黒板に日本地図のりんかくをいっぱい書いてここへ選手の名まえを書き入れなさい。というのです。長嶋なら千葉あたりへ、王なら東京のところへ、名まえを書きました。おもしろがってるうちに地理の勉強ができ、みんなおよろこびでした。（神奈川県 田阪順治）

■ぼくのあだ名は力道山です。そんなに強いのかって、いえ、それならいいけど、はなをつまむくせが力道山にそっくりだというので、ついたあだ名ですからがっかりです。（北海道 須藤進）

比較的多くの男子読者に読まれていた同誌であるが、投書欄を通じて、女子読者であることを告白する者も時折存在した。以下に見てみよう。

※同誌第2巻第23号（1960年6月5日）

■わたしは女の子なのですが、少年マガジンの大ファンです。いつも男の子から、「女のくせに少年マガジンを読んでいるね」といわれますが、わたしは少女のファンをふやそうといっしょうけんめいです。マガジン太郎さんもてつだってね。（大阪府 田中春美）

※同誌第2巻第25号（1960年6月19日）

■わたしは女の子ですが、少年マガジンが大好きです。少年少女マガジンと、名前を変えてくれませんか。（新潟県 荒木秀子）

「少年マガジン＝男子の雑誌」だけでなく少女読者等の強い要求、パワーを感じる。男子のみならず女子にも愛読者が存在していることを証明した。かくして男女さまざまな読者から親しまれた雑誌であった。

【おわりに】—創刊当初の『少年マガジン』の読者の特徴—

同誌の創刊当初の誌面構成や内容を見てみると、戦後からの復興を求めるその担い手としての「少年（読者）」に「夢、希望、勇気、たくましさ」などを求めたものであった。同誌は誌面上での読者同士の交流を求めたものではなく、誌面外での交流を図るものになっていた。またマスメディア（テレビ）の影響を受けることにより、葉淫売部数を伸ばしていくことになった。

しかしながら『少年サンデー』（小学館刊行）との長きにわたる抗争や、新規雑誌『少年ジャンプ』（集英社刊行）の登場により、次第に売り上げを減らし、編集方針の検討を迫られることになる。